中村俊定文庫
文庫 18
492
1

宗雅堂小説文庫

序

凡俳諧狂句の変化をたゞ既叢山も砥ぐとく
樵き謡やむて手伐拱ー鳥ハ飛に倦て帰れ
時ふゝ世あ所き桜乃枝を伐ゞ孔桑ゞ蟻引の
秋をつくゞ或ハ霜雪伐きまくに方ー世の情と凡
せゝん彼をゆゝめ是伐たゞめて手尓葉ゞ茂山ぬ
すゝをかゝ社と晩にしてみるときハ多くハ云捨ても

中村保定文庫

句と発句とし　と発句ハ季節乃扱もひとく感情
と赤むすむきぬ　ぬかれ　すれて天地をん書籍
とそとも事のすくふ物とやいと世さしてを
楽はきていかあ　句をはんものはあとに
桃源ゑ遇　りとく再了　みちハ尋ぬ　下略

右ハいま延享四のとし丁卯初秋吸露庵涼袋後倭太
編集南北新話の發端なりきいまそれ風の實の備と
して加る意ハ角鹿翁の主り去りの裏ちいひなく
さひし句　みんな自乃句合とは師乃判の詞を

後方印　安永三年三月吉
一番　三月二日ゆ月吉

去て老の後乃ふしともせまふ　とためひ　うえかす
も代弟生師をふきひとの教ふく　ふし嵐乃計
るも去の雪ふもむふ　くなりぬよ　やいとめし
句も煙乃ついてもふさんとせ　を己一音これを拾ひ
ふかさのふくの句集とハものぬこれり序もをのれり志
つきぬ己と去付るにいられとのより方とふ　ふ
るおくいりにはものいとくちをさくとくもあ
さりを嵐もこも俳り社会のふいよりところを
ふふりるあさいよあさ俳　ふふりふをしめに
ほおきそへ侍れ

其引

詩に撫骨奪胎といふあり和歌の等類といふことをばた
しかさ倭より連歌俳諧形ちり韓に沉佺期り
句を盗む癖ありといふよみ人しらぬ和歌もしかるなる
ありてかるそゆるせと文えしへひとりのそ癖あり
人のそさりふなれへしいまいふ狂句の輩はいくせ乃曲人
まて左みてあるあ世曲人のぬ逃れはいそ世界を撫猫を
奪答歌ふんとを乃ち志く兼避むとすゝせおよそ

和歌の等類を白川の関と庭と名葉乃姿と情との名ゆ
あれたりひをあり俳諧はまゝて偶興狂言をとり
廣き、と山海鳥獣の游のとゝなれたりの癖とふ
とふゝ同業もを〳〵狂者〳〵それ答を
ちゝ表ていひあてはもつ世知ること迄あるは
ふるいふ曲人ふれを論ゆおよそれをいはゆとふ
況俳諧の草子もおしある掬り兵や元食の
あもものそり表現ゆ乃ものよあれ京の鎖冠を

といふより去来抄とりものの中に

門口や牛王めくしてとり入れ

弱法師つゝ門ゆるせ餅の礼

此二句去来ハ多数のうれすとてめ強して後已

ゝ非なるを悔しとかけるゑ

朽も樹や明石のとすり杜鵑

といふ句義の馬庠むけよといふ句まそろかなひ

ゝとて流儀判のよつねゑ猿蓑集ゑハ除き

ゝりとそみ義園女亭ゑて幽棄の目に立て見れ

廃もなしといふ清滝や波ゑ落ちふる夏の月といふ

をさへんゑ流れ北ゝ方ゑ草稿あるへしとく

とりて及きるせよと病床ゑこれを告て遺孤の一

いなりとやされよしゝ名人の句に精神をつけ

らハしむ後学のいまめとく学ふ(ゑなり

扨そも芭角なる先達の志れける句見ずと呼ろ

さゝしハ角より芳乃人ゑ氏の人乃芳しゑ句

なかものの三十句九つとり拳てこれをひとりく
兄弟へ三つ〳〵書なれてゝろ乃句を對して兄弟
乃句は去りへにこ拙ろさとゆけをあらし是ゝあり論
ろひあ〳〵世ゝ拙ゝいゝあめ後の人乃ち敏りよかないんを
こゝゝあげつゝふゝとよりきゝゝ俗晋子ゝ志ゝさ
なかものたゝゝこれをかゝ英とえきゝむさきん
ゝつれ後の人ゝおつまん四時雖と号るゝちん
心祇なかゝ人はゝ今の雪中菴夢ゝなるく

「新勾之弟」?

新兄弟なとゝ集たりて梓ゝ志ゝおぬ更ゝゝ
判の詞ゝいつゝゝゝ句会てふものゝておはゆけ歌合
六百番五百番なとん做おいゝせて俳諧句合あれや
んれや板ゝものゝしておせるえゝかゝふゝとゝいゝたても
たきひゝとゝりゝゝされいゝあゝさめれと是いゝんゝてゝろハ
爰に伯ゝよひゝゝかゝさゝしの草乃まゝふゝはゝありゝ所
常俳ゝとなのゝりてえいゝんのゝたゝしゝりゝに遊ひゝゝに
をゝしまつきゝ乃ゝとん孔ゝとふく蓍ゝとふく見ゝ行ゝ

ふ師の

朝

一言 安れ二ことはあるべき 誤り？

したつまたくりは凡俗をしへられ一嵐とふう
いまは涙どもありてふらあれ兄とも弟ともいえむ
らひあはたとなるうさまれさ元（きえ）ありてんふすも
十おりとせうかとえいうれんりの句するてもあるど
忘れ〳〵むうどはらてて業の事ようのおはれす
道しうをもの爰のえしめをのれ越のふりのかを
来て訪ふまれくふとていうれの凡源は拾しう
むうしかくをせふあるようもんせ伝の義乃口あり

コトハルかこと？

ハさひとふあまを志をうとふはまはいお世挙てく
代爰の凡と情と伝花のど月のごやいやまひ手よ
もろひとさるなり志もふ師うはうるしをしめ
爰の門ま十のおほのひるかをへられ野坡とふ人乃
をしへもう弟〳〵純一国もあ挙我ハえしめ晋子
乃まさハてもふもをせ伝のおき形の流くめるひさて
はかるはまあるよやそいとおきありふ原人の下に
をくれるやるもあれハそろこう句ようむうふ 伝

一言は五角まの仲人？

みーるかくなる安きるすくやふ乱平めなるたと
きもいやーきも拙くておろーにきも四時となりいつる
もの何るおきこーアーこたこたさふふく言るいるんに
いるきさふなろーるすやとくむろーのこと
いへうの翁の口質ハ姿乃ふく歌の翁るおるを
りて翁の凡乃教とるなりとせちるすめー
うとろ為こいくへさりーいひたこをためも
ちに一年こりるよりてあまるのかりふむつひ

高但言へ
永寿さが

いてーを己こるひ但の加よりのほり来ぬるをこ
へろ等ふるもむこりの夕ういつをえせるいふ
去年の夏いくすめー翁のいあーりのいま
やーハかふものるやとなりにこめ口引いてー
をのれるハ指えおるえりの句こなりえれさしたふ
形とそはーめより探しるもの残さふうへハかえり
乃句いくるる拾へふるあるあ己れりむるあるま
りせよやにれこに遊ハんひるのすさひとありとて

かのおもふ句兄弟のさたしのあるんおもひよせたるかな
かれこれこのかの句とつゞけし草子のみちをひらきこその句に
むかしひとかれとあらかれはいとこれのこゝろまで
俗かよひなるを捨ひ骨ハ肉に合せ胎を姿にたくひ
はかむかしの人乃もいまの人乃もかく主かいましむひ
し友かれいまもはしに志らしむ人のもとちかくに隔れ
それのう紙たらんと見ゆるハつとくしちかしも對ん
くしふるをあはしみてそハ車もなけなき風流ハ

殊に座りてあれこともまるにし侍る外すやつよの
かをしせえ世人ふをして象をさくれる盲とい
ふ世くせとよしく墨つれむといふそハ牛馬乃
蹄を見て迷き速なをあるそふ人に似たしむよし
一たひつれは他まとして二あひかいとるへかしあ
とてあらかひものしたる已松まふまつかひくハしは
かとに二石あまり乃番のはしかしの句とまでなりぬ
そまてとしせしふりさけ見よやうりそめまで二回つ

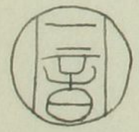
拾ひてくひしりかくりの枝をそなへひるを初つを
といふものを一度は十二のゝくむといふ一崩よ
そこハ一たひ口を切けて十すりの句ふん吐るゝと
ゝへてさハ秋秋色ものんたとふと笑ふさにふ
凡句兄弟といふを兄乃句さきにすへて其兄のんな
等しなをかゝくへたゝして等類をつけた句ハ人ところ
面のとくなすゝへいへとそハたゝ句化る名ゝを
て秋毋乃胎内に胞二ついさゝをこれる雙ゝを

もの面も孝者もをゝなれう夏の井戸刻ゝむ
をゝなふ句をゝを兄弟ともえめきそれさへから
かをちのゝとハ味のいさゝかれるかゝのたりひあるを
ちゝんさりも漢ゝ伯階仲階なゝ兄弟あゝ容貌ゝ
よゝ但ゝるゝ弟の妻ある時せこゞもゝへりて帰乃
逆ゝりしといふゝり逆おしたのかゝりまゝの兄ふ
人乃立ふ秋凡てふせをなりとゝろへいたして
逆ゝりしそんいと孫ゝふとたゝれはよゝ

又は兄の陪ゐてあれをおほゑちゝひ相をそんいえ
れあ逃おとひゝとゝやかゝ兄弟のそゑ俳の句
なりとも兄と弟の姿ゑ情ハつゝ所へ〳〵ないま嵐ゝ句こ
を已慢ゑはゝゝとつゝひ從弟やいとこと会といつゝも
こハ弟ゑ弟の句ありて他より兄の句をゝ兄弟と
絶ふれて入る人ハ答ハつれゑおほせよせゑハ渾異て
腹ひとつ復異て渾ゑ人の兄弟もあ弟ゑ
やゝなひ俳ゝかゑのをゝゝゝも有そゝゝさハ

とて凡の蔓に茄子をふゝゑ鄙言もあれ
そはさゝゝの蹄もをふハち凡農實とと
ふつけ葉ゝゝこれもをのれゝつるゝなると
角唐衾の窗あゝりゑ人乃誠ゑをふひなる

嘯居士一音述



言はずして

父母の恋しうまし雑煮哉　蕉翁

うら見うらにの門と見わる山路哉　仝

蓼虫のまして寒ふる雑煮山路哉　一茶

撰者曰今世蕉翁句解の書を撰ミ法相宗ちくに
ゆ法すとの説も方方ハ已くゝ見解のこゝ除きとゆくき
あり翁ハ伊賀なる土芳ゆ伝ひ一句集を及
拙ゝそ世人のいまを遠くるあまさみを古人の名ハ奇く探知
至し度く他ゝ解ゝ一ゝさゝ事の
翁の雑ゝハゝの山路ハ紙(ふろ)ゝ多ゝ彩きゆへとゝ一ゝを有し

土芳の「蕉翁句集」

をろ〳〵後ろ父母を忘れ妻子園の夜ゝ啼る鳥の琴
きけそとゝまれ〳〵よりも心悪今こゝんや
日の本乃柳も好まるゝ事ゝ乳眺の家ゝのそんて初て
名人の後章歳〳〵こゝ保を知れ
嵐此旬を拾てゝ名ゝ者の二章を旅矣ゝとしてゝ
哉や此物の狐の白ゝ風ゝに絡るの哭ゝ川と神坡
めゝし此後ゝ和ひ〳〵と又ゝゝ嵐ゝ句ゝ〳〵
をゝゝふゝゝゝるのゝゝゝなれゝ旅の毛日乃
住ゝゝれ〳〵 仍ゝゝゝ章

嘗の身をさうさ海に初雪乃　其角
うゝひよ乃兄ゝすゝのゝて初雪乃　肥前　素行

宇久比須農さゝもゝれけゝる初雪乃　一鼠

身を逆の嘗世人知ゝゝ扁実ゝ辞苔杜鵑ゝハ
はゝゝもあゝんゝゝひすゝる拾て兵後ゝまゝゝゝと盛す孤
を白ゝ木ハあれゝゝの書ゝ此旬木ゝゝ嘗ゝて初雪の
絡なゝ〳〵と絡ゝ句ゝゝハ蕉門一人の晋ゝ絡者又晋ゝ
下ゝたゝん事ゝゝゝき玄ゝ之最考〳〵
嵐ゝ句ゝをゝゝ此後ゝ加ゝ嘗の形ゝゝゝ岩ゝ
ゝ或ハ俳を拾ゝさゝゝゝゝゝ人の上ゝゝていて
独ゝはゝむゝゝゝのゝゝゝゝれゝさゝ
ハゝゝゝゝ〳〵ゝ他ゝ目ゝゝゝ人のゝゝ山家葉ゝ
ゝ孤〳〵ゝゝゝゝゝ孤ゝとゝゝ此ゝ冬暑ゝゝゝ

雄雪のうちより咎うちつゝんとおもひあるハ前栽萩の
あらりの籠をうゝとさゝなきかたう一枝折すりてれう
こゝろのまゝ彩をかゝあけさゝんれーうんやさもうゝ
うゝむすして雪の沈黙とゝ句ハニ句をもつてもて
三十六歌仙をもおもひ出ハ前句句等用ひし洛陽浪花の
市偶の歌等とて彩よをもつて人あつて皆の上を
よくよく比人前句をやすてたゝ後ひしとゝ

まゝもやゝ雪ーさとゝ月と梅　翁

五梅花月ゝ間酒ふけーきの家　一鼠

義の句ハよそ人のまゝ月の梅月とゝろ〳〵あるも
此巻の撰ハ信州松代小川氏伯素神義と翁の自画賛
まて大幅の巻物ありゝ見ゆるとゝ此通ハ
五梅花なりこれて物をもとゝ月の実地を見よし
前句句ハ五梅の花の月ゝ句ハ月ゝ句ハ
よりもけーきさゝゝと雪と晩所詩と月下の美人と
数ー伴ますよれ歌

雪ゝ社よりうゝるやゝふ味家　翁

見わたしにひとり降なる高雪山　一鼠

高のる　あるかの事武橋所とふ事より偶然一おかせ一
時より一やそいうんの風俗もとあんとする人雅邦ある
さそ道てあとふ事ふ長き初出ありて今日旅ちすふ時
句ともふ又云大和腦峠其の時もありいれもとん
嵐の句八の蓮華岳の頂ふいとん人ハけまと思ひ
あとる事色もあんん

猫ゆえ恋嵐もとんあいれも　江戸　琴風

孫を寝かす前嵐もとんあいれの猫　一鼠

嵐の時せ一はある人強して日猫の恋とふ事を
事のまとをを事あるとと嵐会れハ此猫の恋に
やつれてかくねるやハとんあきすとう寝ると
情とふをなりとふとてよしくあまもを
意なるさハとつくく主を新する人なして新ふと
会ひとちきとをもなけゆ迷と琴風ふ一にに
ハやまく情なりまとれ孫とふとふれう
枝底ハ日あるとあるを孫を新とふ足ふちの
して仕とをとりてめまアねるふあとふふう
人の上ハ高とハ高とをとなるく我の事のおをとこの
ふつ恋くなまとう歌ふりん恋とふひまとる事の孫と
猫の恋として此句姿あるやとい（丈一嵐れつく

かすみたちは枝に近江の山ふかし　京　言水

初霞とちり高いて法華経　仝　蝶夢

斯てこそやまとちるめ初霞　一鼠

ちき〜代〜（代）を（を）

くらひすぎ蕎麦の中の滝月　賀麥水

閑なるは鳥は鳴うし晴月　一鼠

麦水の滝とはりのなり火は世のちるまと

ゆよりて色ものとり氣

風の匂ひ鳥夜啼寺をかくるまの月乃滝けを

想夫の情よせ原又月夜移曙の鳥なとの

やとるとも鳥は鳴うしと滝こうる月の余情ヲ

よーるーやさでの花とり　蛙　嵐雪

さそこれやたち井弘　蛙ふる（を）り　一鼠

頭よりその蛙は音聲を移す哲新評とみる

至さり

五月雨

嵐々白雲まとり会られとよーふしと情
むしろふれりとあれもも古井の蛙人間し

日も暮て増るとそ乃あるまきれ水　京　儿董

まこな弱や湖水ゑ隠る牧乃駒　一鼠

苔の匂ハ春水満四澤とらあこそ伝るう
次ハ牧のあらあれ湖水陽獣の去とそ
水面ゑむくゑる自然風姿句たけあるといえん

雨弘梅ちりしくを乱ゑ春ひく　浪花　大魯

面の菊ゑ弱竹くゝ弘寒れ　一鼠
苔ハ老いるくゑ乱ゑはひよそ（餘光）ひあて去とあり之
次ハさまそも立除ふ法ゑ雨の菊ゑふひをくゆ色

暖ゑ為乱や樹ちがつゑほる　浪花　諷竹

嵯道和馬の背あ〜ぶとまあ　一鼠
此番ま色をゑるゑすれそ新弘ゑ
二句　俳曲ある

死さき人望もあり　祇山　江戸　祇徳

なくさきに浮世や捨ん　毛孔山　安藝　風律

花咲て　死もあいの病哉　浪花　来山

もちまぬ　又かとときんの川死のて　一鼠

初の句ハ芳野山ハ世くさて人一人のちまくまる義

夕春とよめれとそれあまく主を下人よそれ[illegible]

ものふりかをくれてすきけるそ人あくも

あらし

次の句ハ世を捨て山ハ人山まても狩き射いちりん

老人の用ハふりかをくまるをよ不義のふりちとなるとも光色

ハおりをよ[illegible]をの面さあくさん

浮世や捨んとこそ思ふ人ハ[illegible]

又次の句ハ乱方下ありいつれ盗人を嫌もたれ

この事を詠ハさくよ一世を花ある[illegible]

を病の一字一句の肌響あるん

嵐の句此三句の境に入て死ぬ決ひをそこふと

すれも又ほくきくを表弘をわりらふ何のうめそや

たつらめそや　生涯の教をも社稷月雪ありうり

眼まのあたり青葉山ほとゝぎす初鰹　江戸　素堂

花散てあゝ惜しかるべき時なれ　浪花　栢舟

ゝゝ卯の朝寝夢多や初松魚　仝　二柳

人を武士花はさくら木初鰹　一鼠

素堂の句は世人知處にして山には杜鵑海は鰹と見同息の三つを備て鎌倉山海の美致の松江の鱸をも祈せしなゝ句三隠切の詩とす亭の句も敢て三句につくるをよしとすとつゝ

次は東武にありてと詩書あり東都をとにては事氏奥を尋ず先すゝやかゝ花おほかたなる天てまく後七日とゝ徒然草花の盛り時ゝより方とあり鶴おりて七日ゝ過ぎ

一句最風流あり

又次は日しく書翁をいふの毒魚といひしいまは此迚のわれはかは市に賣聲家戸をいさましむさるを昨日はさかりを云てなといふをはをゝ作者の歎也

いたき鰹の盛なると後朝の衰を情も大路のうち町

前の句素堂の句に趣を同ずして毒ふるあす人は武士

花を桜木と祈して初鰹武士賣する魚は初鰹

といふゝこれも三段切の句なる一とある人のいふ

若葉の陰る筵ともゝけて大鉢の花のはたひらのごとく

たゝしたるみなくめでたし翁の句は六月や朝の東とし
塩鮭とゐて撰者の望の独りなる事

若竹や夕日の淀川となりぬる　京　蕪村

わのたけや蕨を鮎はさ舟さし　一鼠

前ハ夕日の嵯峨とめとめし新弁生し筐洛の内外
の境春迫暮の眺を最高し
次ハかゝる淀地ハいつこハれともとめすして桂川を前
ゝせ幽宣琴を抱ける主や楊らん

柳さん落葉するとまあしの乳　加賀　後川

青梅樹のあらしゝるあれ暴風ゝ　一鼠

前ハ青梅樹の落葉といふことを季節と設定をいふ
次ハ地名の風の吹吹さらせ迅雷をいふ

峰神や身弘とてとの雲ハ動く　尾張　暁堂

白雨やゝ後へ迎れ乳をつゝのす　一鼠

前の句ハしきりにはたあくしあむなりあいてふたあき懸
つり番たあるハ長堤なとりゝやとゝもわかゝす走

あろひこハ己のしかゝるあそびきめゐる事をいさん仏の
次いいそかすはぬれまじまをとゆゑしむ〜雨のこゝ
うしろ〜逃る心つゝさるとゐふ人上のいまーめにも
かなひて夕ゑゐあるゝ人さま〜えらう〜たう

蝿おそ〜後ゐるゐ恋のあられけり　坐白　千那

念仏や蝿おそ人のにすきひ　秀蘭

ちせさなすさ法のゐ世わ蝿たゐ　一鼠

蒼蝿を憎の情ハかの賦ゐ書せるか釋の戒行ゐ一夏
籠といふは三伏の日ハ飛虫はひとー辭ゆゑゐ地を往還

すれははかられも虫を実てむなしく戒を破却す仏心
安抜すとかや此三句の主ハさにハあゝて
千那ゝ句ハ漸ゝゝとよしさやるせなく手ゝとに有あゝ
扇なとにはたとおゝろせーかつゝ杖ゝ一会三千
蝿蚊なゝとも今の命なるものをとしきゝに怨を俺
け人仏弥勝なり
秀蘭ハあゝ法師の導師の一牧起請文をたゝとひ起兵
動静丁寧を呵るゝも厠ゐ入ゐ一唱ゐさゐ融通
の人なゝん
嵐かゝ句ハ世事を過なゝわゝなゝて徒ゐくゐゐ人の
さまをいゝるか五文字よゝ人上ゐなひて一句仏あ可
三句目しゐもひなゝん

杖とも牧をこゝ後すと夏百日　千那

とかさめも佛ゑかな火とる虫　一鼠

此二句も前の心み等しく法氣をふくむもとゝ乃
五文字感あり
次ハ香華燈明ハ佛の欲表　終ふ此世のはかなさを
厭ひとかさめもと言をかゝしてはるかなるを

古庭に有きゝ〻ふる牡丹ゑ　嵐雪
いみ〻しの苔ふるの敷ものかゝん　其角

此家ゑこれハと問ふ牡丹ゑ　江戸　専吟

地井戸ゑむ〻ふるに梅ゑ　一鼠

古庭の牡丹ハ一句趣向ゑのそむすり秀逸を備たり
次の二句等用ゑさるハ世人知愛之されと普子の句ハ
五元集ゑ牡丹抜とおせう持といふ一字ゑて意そこはく
遠〻り又他の集には牡丹ゑとあり私にゑゑと致息ゑて
一句的指あらん
前三句ハ花の古根ゑ年〻栄を又するをいふ
風ゑ意し赤ゑかゑ古井ゑと並〻さきけの字普子の

「氏本」や領のされてとつゝ此の字を忘れり又古井は
やまふき菊などにはせたるハあれと氏花にはめつらしく
何人の捧げし古花なるいとあハれに古株の牡丹観
想も市氏花る心あたらし

ちゝぬひの鏡ゝ牡丹くゝ　其角
雷雨火の燃付さうなる　江戸百萬

ちりとそけり　賠〃　一鼠
晋るか匂ハ筑前紅をと端書有晋の馬るか駁しハ
馬紅るとそ鏡る花の影つるハ化粧殿の蓮るか

宮司か坪の蘭ふん〻不知火よく知るひかよ世たり
次ハ燃火混して雷火を征匂調雄高なり
狗の牡丹の匂る思人大方ハ此花の異名ることを知り彩叔〻
辞の富貴にたり青桐か伴にかよ世花の心深きを孫
「杜鵑の留守をして孫なを世日暮るけりの日数かハ八重
はなふさの大なる匂る新の花の中りとあるハ最上を
いはんとて「をーおーて花一ぱんゑと好士心くゝ言を
尽すいつれ花のはふやかなれはゝ
嵐か此匂ハ前の古庭なとの書とは意かハるて氏花照日
とそゑに映るを眺て三月退ハ朱簾捲し階を下えかをく
咲る其あたりほくくく眼ちてく映ることて眠はかり
と作たる実苑の面いまゑうち自かくゑ巧有てちか
を高雅ありとゑへよ知

蜩ふる川をせる蜩ぶち日新引　京　宋阿

瓦山やおいそをいる蜩乃琴　一鼠

二句とも強暑まる堪

新田まつ人もあまてや撫子花　京　雲裡

あの家をまつ婦人やあ帷　江戸　心祇

高灯　竈人のすまるまれんもなし　一鼠

右三句歌八妄語ハ句の虐の合たる高山流水の吏　文

ある朋友の歌ゑ〳〵よき書ふるまぎ

何となく秋も一日立ぬる　賀　南更

雲とふ秋さへもあ雲りこの乃　一鼠

前ハ立秋の雲かなるを

次ハ普秋の一夕ハ迫るを

日毎ゆ起ゑ風あ秋乃風　江戸　柳居

石橋や指強ゑ新滝ぶち風　一鼠

前ハ滝強身ハ入ぶち

次ハ冷ゑ殺義岩ハ入

あさがほ　舟泉

牽牛花のさくなと　咲て荒まゝ　一鼠

蕣　詩一日さく　東籬の外　凉佛

朝顔乃今朝さく　彼岸哉　一鼠

あさがほの　俳句　聖の　知るて　孤ちて　亟　加賀素園

朝顔を　明るハ　見るまと　人ぶち　一鼠

舟泉か蕣は朝なくに咲かへたるも夢のうちにをれくも咲たるいとわりなし

凉佛か朝顔ハ其次人ゝの感　称せ一句　秋の日ぶちからなけにさもひやゝなる暮かけて淵かちに　堪　（堪）

たるゝれし　わりなし

素園かあさがほハ尼か千代なりし時の句也　聖咲花の孤ちれ　やうといへるに死法の扱る姿をかへたり　此事

亡ぬかむかし　南北新話るわん

鼠か三句はしめハさく行と咲てとゝまる花のあゝれを尽す

高ハ此花のうつろひ行ものと見えーを彼岸の比忘るゝなり

花一ワニワいたいけにさけるを見おろす又の字　寄持ゝる

一句ハてゝ之の一字一言の詠法奉ゝすゝ　かゝす

三の句千代か聖の花とて　二の句のゝかゝて人の上と

無常迅速のことわりを深くふかめて行くこゝろいひ意更に深

あゝ　みすや焼　茶碗　肩そ　の　ま　其角

化野のあさ霧　菌（キノコ）見　一日　一鼠

こゝやすらふひまもあぬ野の煙の末に坊が灰まく
疫病岩　暑の果に焦倒れ　茶筌肩といふる先
あわ凄し　為孫の家身の股蓮　爺の鳥のとまりこゝろ　拙枝
此やけもろこし　観想等から　ん
論日氏守　知　幸ともの焼冷の唐茶の売と安人あり　そは
論の守低して　而低くふ　ハ安達ノ茶あれやといふ　同く
たるて　ハ唐茶の冷売を見て　化地を思ひたる　冷売の

化地　ふ有（くもあらし　ふか論ひかとか
嵐かゝし　日ハと　観念世　木のふ　ふ　てふくさひ　郷華
なと　いひ人の食す　ま　茸　ハ　あ　て　蕨義の陰　ふ　ふ　あく
まて　生　ま　し　ゝ　ま　ま　し　ふ　ん　氣　凝　て　形　を　ふ　す
日中と　ふ　ま　湿地　冷　こ　こ　う

地さゝしをんな風ふもも身ふ　爺

あゝ　野やさとふ　風　芒すれ　一鼠

爺の白い貞享甲子　秋菖蒲の江上を　お　ふ時の紀行
又して世人　ふ　を野さしの紀行と　行　調　鶴　ま　枕
すも　怖　ま　ふ　首　金　ふ　ふ　ま　ま　ま　ま　ま　ま

嵐かゝれる並木おすおかまゝきは供たれと嵐ハ代句
嵯峨ゆゝ和と乞せ一時慢ゝ言捨ゝなりとやといひ
落ゆくとすゝたるやゆの碓ゆして松ゆよるに
あらすあのあふめゝり孤芝ゝやゆひ入ゆんそい
句主の喜ゆして赤い点ふす儀時狂ゆゝれあたし
ゆの芝ゆ凡孤吹あひけるは孤ゆゆしゝと出し
きゆの孤とおもひつけてゝに並ゆ
世孤中のいゆちあゝめゝ稲孤ゝに　江戸　越波

露
孤露や何をとゝもれ稲むしろ　一鼠
前ハ稲の和訓いいのちのねといわゆせの中の人のいのち
の花といゝるなゝん

次ハはかなゝおもゆ露なゆゝめてゝゆ稲ゝまゆ孤露
の裏何はとゝあれといゝるゝ朝露の句なゆゝゝれ赤雑祢
ゝもいゝゝんか

名月に麓孤旁や田乃人ゝ　翁
名ゝゝやなゆの影ゝゝ水ゆ夜孤旁　越中　直生
峠
嶺ゆゝ八月ゝゝゝむゝゝゆを夜乃旁　一鼠

直生か句ハ月ゆ縦ゆ望潮汐尻ちゆゝ川水陰氣ゆむ
ゝゝゝ雲の海をなゝす翁の眺ゆ等しき様ゆ生又
山水々宵の眺ゆ一句己か主なゝ

嵐が匂ふの氣は陽られて　峠なほうとうとあふさ
たる霧ごとして月其中は住なん最餘情深

白菊やさすの毛くまれる月夜　杏雨

狩白し屋も黄菊も有（きく）　一鼠

杏雨の句一句のうへ（あきらかに少カ
嵐り匂夜の菜の眺黄色を表色をうしろ
ろの
猶白しと轉倒のてにをはうん

嵐雪の　黄菊をそのきく　そのの色なもかふ
此二色最はなやかの色
此句者ふを嵐り句　評て曰予一色趣の彩ほに

あり一時黄菊白菊の取捨雷る人あり頃る作れる句に
菊の菊黄ハ黄まかへる　朝ほのけとせーか此句まハおよ
へくもあらずしかれども此句有（きすとふ者の句ことにり
るこうん尺ーものをなと博すましやといふ嵐笑曰
難陳ずなから兄ハこれを我園の朝夕眺る菊と少し
物習の餘情ハ他にありたとへハ友かきの許へ表詫みまか
至て主か作りたのし玉蘭を入てうそ見に（と眺たる
又半輪の月きらめくかを有ほとの菊皆白ぬまと
ゆるまおひつけて屋ハ黄菊も有（きにと　いふ
有へきなりと答ふるまの戸口をつくみて嵐か風志のたけ
たるを感す　われのこ斯あもわるや

一とせ忘れもさひとり鈴鹿川　伊丹　鬼貫

さひあゆや石にたきする大堰川　一鼠

鬼貫が句は此度旅せし紀行の内なる

鼠が句ハ嵯峨に遊びて此句をはたらとなり

升買て分別の乳月見ぶ　翁

されとてもこの二つも買て市弘升　一鼠

度量考曰一升ヲ日爵二升ヲ日觚三升ヲ日觶

四升ヲ日角五升ヲ日散　下畧

又斗ハ本酒器ヲ用テ以酌八合有之ヘシト

翁の句住吉詣といふ集はおく路書に堺市一個引伸て有

分別かなとなるハ伽羅あるてゝ心をつまぶ

鼠ハ是ハ市ヨあひて福徳いの乳人ともに升買もたる

かさまて二ハ用ゆ俗情いとおかし

石墓を彼に根こそや著板　野坡

うりゝとまるもあれ孤の乳　江戸　蓼太

花ぶの〻加る夏や昴や秋乃雲　一鼠

三句品矣とゝくも甚果〻興あり情あり

嵐雪句ハ俳諧問題集編る時散し女郎花の花や秋の暮として之句か（りしか故師ハ俳諧を踏襲して片歌をこそ一鼠吉の秋師ゝ流口前集ゝ入られし暑秋の句いまもみる時節を会せたる迄まて感ぶかや依て斯つゝりか（んハいかゝと此句を苦く師手を指て善外それゝこそ歌もかよく既ゝたき事ゝ秋花ゝさの粉ゝ清垂てとあり片歌ゝかきゝす吾ゝかに質なハさいかいつゝもおかしといつゝまゝ模倣よろし

よき家や夜ゝふ背戸の秋　翁

えりやをまてすめる物ゝ　嵐雪

名月や弁をゝ宝敷群　春角

木弘樫ゝ者ゝ多ゝ孤一ゝ　涼佛

背戸門の雀ゝ一ゝ孤　一鼠

翁の雀ハある富家ゝ宿して主の心やしかぬを愛てせゝれ一句のよし詩書も侍りと是ハ

嵐雪句ハ世人よゝく知ゝる

其角の句ハ徒句ゝを翁ゝハよきかるなりと許れしよし　何の某ゝかゝ

そゝふさものか

凉佛の句ハ世ゝをせゝめ翁ゝ武山ゝ行脚すゝてあゝ

しるの侍にてかりそめにたづねられしかやうに書て
予此句をかろんず師等をうて別座に連句すたるを
句ハ連句ハ句なるを
嵐かぬ句あれにしひとりうとおぼゆるおくそこ蓮子

こがらしの果を有りける音　京　言水

風乃一日　吹ゝる長ゝ冬ゝ　伊勢　團友

ゝりゝ　ゝ　に出ゝ　一鼠

言水ハ眼前風の吹わたる果ゝ海を見やる
風ゝ一日をこがらしの果をつゝ

嵐ハこがらしのうつを果ともゝきゝをゝ
ゝの豚　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　京　太祇

鞍ゝ　ゝ　鞍　鞍　ゝ　ゝ　ゝ　一鼠

河豚賣人にくふへきつらかまと又ゝ人いかなる人ゝか
侍ゝん此人をおもひくゝふるにいとあれすもおの
次ハ鞍鐙ゝ化せゝか山ゝの人のゝおもひゝゝれてこれ
もおかしけれゝつゝ

此ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　利牛

火をゝてハ厩ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　一鼠

ゝに

ゑ仙や人ゑ
いろり炉上をふ芋や後生　一鼠

季とする物ハ冬とい（ともとも寒夏の花

金屏雲　松のたひやみそこもと　翁

みそ汁とあよ草木ゑ花ハ春さきの後　一鼠

翁の句ハ既文芳ハ金銀屏ゑ煖暖の境を許せうさとおほゆ
れ共能とふるゑ世人知王仁の歌すうふなるを俳諧の俗事における
陳人とかふもの、ことくなす業もふき人あるハ孫ゑたたすけられ食夢ふ
世せる人の四壁ふかく閑一風をいとひ火傷てひろ狂ふやとひ或ハ
求て涸さといてんし果やふと俗ゑわくきなといわ趣ゑのこえて一句の

主意となるものハ不義ゑ富くらひふくれて已かまくいふ者ゑ等しき類ゑ
せめてもあれおわしまいふきを又てやあとあるハ風流ゑ人さま
なりかしかくむたとふくゑ葬應物ゑ詩に貴賤雖異等出門皆有営
と作れるとく新陽の草の栄枯なとおもひえあらんあらまほしきも也
鼠かゑハいま世人のするゑ句意ゑりたひのといふ人事の教誡
をふくみゑ人としてあたく月日をかの冬籠てゑことにとくゑ人ハもけゑ
口惜しからん萬物一體とふふるゑ木すゑも閑寂て花の色を変せ
しも幾ちとなく落葉の秋と恨ひくさ泣くし再萩葉ひこえゑ
春季を下す人ハふと徒なるゑや草木悉皆佛心を俱すゑとまなし
とつひとりくる一とせの光陰宜ふる形偈言とつふとゑ古に後世ゑ
導たよりふくさむやゑ最く孰ゑ笑のさひおもひはかれけも
一句よく味（きものゑこれる鼠ゑ句つかゑ姿をくくふるあれけゑ
家の俗言をわりゑ人俗ゑきをつふ京師後太既冬籠を冬隠れとも
ハなちゑ　そ

蓑笠を弁田へ戻すとられぬ　能登　晩九

降遂ぬ雪を拭ひ〜やこのとも笠　太祇

このゆきぬ京まで来たるて蓑と笠　一鼠

前の句ハ蓑笠ヲ作田ノ人の書せ一句さるをあ人の説ハ
蓑笠ヲ作田ノ人を(ことを)ハ返すのつきもやさふかいのと
より竹田ハ返すやといまくいんをんやとふ
かゝる論者を見ん為ちゆ人のいやるを人あり
論ハ論す　理屈ハ屈からす論をけぬ雪ヲ蓑
笠のおゝとハ此人かゝいとおゝ名角して越の苦

蓑笠の格笠をもとめて財布ふれかし雪こよかし
と行つけしかひもなく興ゝて帰るとかいけんとく
降をけぬとひゝ屈が京をたもてとゝも命
もに却の

一艘よあまる岡ゝ〜やたゝ〜ふ孫　武蔵　堵九

宝舟　枕そ〜い〜ゝ〜ぬる身ゝ　一鼠

論曰宝舟ハむかしより京坂には年の暮ヲ賣れハ冬の
季とす江都ハ元日ヲ賣れハ春とすこハ季節にかハるの
論なりもとより宝舟ハ十時咸目覚波船音哉とふ
田文歌をたしめて元日の夜い孫つゝ六爰の宝を又ん
とする要之　楷　九ゝ日あまる枕やと　いつも

嵐の枕をかりしてぬる夕よもとともに用を詫る句
此られを春とふつし宝舟夢の夕ハ勿論冬ゝ
剃たて布袋い尾しし宝舟と題ぶ此れる
句ハ更ふるゆゑ論ふ

懐舊

落花の一句を残して夕まかりし人の追善る

座ふ松をしく塵ふ松をふさくふ　乙由

去年何ものし花ふかまかりけるもはれる夕有りける

咲ふるけ義ふ花ふけるも花ふ　一鼠

来山か春に別れしに送る

おもしやまれにの秋さくふさきめ　鬼貫

ある人の妻ふ別れしに送る

ことりやたふさくふ妹を抱たふ　一鼠

師吸露菴後太乃追悼

ふ弱ふの弱さふ弱ふ弱ふ弱ふ　一鼠

うとふしや花ふの人ふ樒とれ　一音

右二句詞ふもけれは略ふ

やつまつ去年の春やまひ去きりに迫て去ぬ一ぬり
しかを氏師は高野より下り洛たるひける後
大和何某なる人のもとく文送られしそ文
ぬ中に
何ごとうて涙をへるに一亂大病九死
一生ゑ和ごぬ此事ゑ下略
ゑ世そこのせられし我はちからく師ハ
ゑまゑ接ひぬさるを氏は仏法ふてせつて
何某ゑ訪ゑあきし此文抽ゑてもたるか取
いてゑまゑつけ今文會者定離の理まて
おもひめくすたあるしけそろを一くさ出家すとぬた
わ法よあとぬしをを存去ゑ一亂

角ゑ為ゑ此世一代の實ゑ仏
法乃志ゑ法ゑ接ゑ氏集やいゑ
今ゑ此業ゑ聴ゑ飛ゑく此後ゑ
おゑのゑくつゑひ風流の用ゑ結ゑ其
事ゑ話ゑ人ゑ嘘一音兼ゑ残ゑ思
氏人くゑかの世乃極ゑ氏ゑ始ゑ
法ゑ作ゑ氏ゑ人世ゑ紙ゑ後ゑ此門

ホトトギス人形りさ猫ハ蕉翁の猿子
小蓑遺着きし一句ホ晋子況の入
一事を尺しうし今麓名年の位
さうさ一意一音他人の如ふこと
のさ我ちりしことの為をハさ存
男ほホ俳句猫ハホこと四をりい
さむ〳〵時うを無〳〵ハ二子姉ちい

猫のの拙薄ホ拙しこの風俗
のうきりを知る猫をいまきる世ホ
一事ひ見きりし事此あきをうを
芋状猫の如きうホ男はうより我
ホつ事侍る為ニ　大魯

安永三甲午孟夏

安永三甲午年五月

書肆

大坂心斎橋筋一丁目
石原茂兵衛

京都麩屋町仏光寺上ル
梅邑宗兵衛

江戸室町三丁目
須原市兵衛